



貞女おかん

はじめに

岩手県の盛岡市は、江戸初期に盛岡城が築かれて以来、今日にいたるまで東北の中核市として発展してきました。名峰岩手山を望める中心街は盛岡城址の膝元に栄え、北上川と中津川にはさまれた水と緑豊かな小



大泉寺の「おかん」の墓(岩手県盛岡市)

「私はこの世に思い残すことはありません。その印に明日墓参のおりには、石碑を打ち鳴らしてください。必ずカンカンという金鳴りがするでしょう」と告げた。こうして、「おかん」の墓は不思議なことにカンカンと金属のような音がするようになった。

「おかん」の墓

少し長くなりましたが、これが伝説のあらましです。大泉寺の「おかん」の墓は、花崗岩なのですが、叩くと「カンカン」金属音がすることから伝説が生まれるきっかけになったのでしょうか。それは主人公の名前が「おかん」であることから明らかです。ちなみに花崗岩でも風化していな



盛岡城跡の花崗岩巨石群。右上は烏帽子岩と呼ばれる有名な石(岩手県盛岡市)

都市で、都市計画家の石川榮耀は日本三大美都に数えていました。その中心街の北側にある大泉寺の山門をくぐると、すぐ右側に小さな墓石が置かれています。表面は摩滅して戒名などはわかりませんが、墓石の上には小石がのせられており、それで叩くと思いがけず「カンカン」という乾いた金属音がします。この意表をつく音のために、この墓石には「おかん」という女性の悲しい伝説が伝えられています。

「貞女おかん」の伝説

ことは天正19年(1591)に遼東の九戸政実が仕える畠山重勝には、「おかん」という美しい娘がいた。当時の盛岡は南部氏が治めており、政実はその家臣だったが、謀叛を企てていた。重勝は主君を諫めようとしたが、かえって危うい立場となった。そこで娘の「おかん」を忠臣の三平に託し、将来は夫婦になる

ように言いつけて、隣藩の秋田に落ち延びさせた。時が過ぎ、慶長2年(1597)になつて盛岡城の築城工事が始まる

と、日に日に各地から工夫が集まった。故郷が恋しくなった三平は、この機会を利用して工夫に成りすまし、「おかん」を連れて盛岡へ帰ることにした。

三平は工事現場で一心不乱に働いていたが、ある日突然崖の上から石が落ちてきて両足を切断してしまった。そして、その頃から土工頭の高瀬軍太が、しきりに三平の家を訪ねて来るようになった。それは不具となった三平から、美人の「おかん」を奪うためだった。

日ごと日ごとの蛇のようなしつこさに、ほとほと困った「おかん」は軍太に向かってこう言った。「夫が生きているかぎり従うことはできない。明日はちようど観音様の縁日だから、信心深い夫は参詣す

るのであれば、今宵呼び寄せましょう」と場を取り繕った。その夜、衣川に呼び出された袈裟は、盛遠に「夫を殺してください。そうすればお互いに心やすいことでしょう。私は家に帰って夫に髪を洗わせ、酔い潰しておきますので、濡れた髪を捜して殺してください」と言った。

それから袈裟は家に帰って夫を酔い潰すと、自分の髪を濡らして床についた。夜も更けると盛遠が忍び入り、濡れている髪をさぐりあて、一刀のもとに首を切り落とした。しかし、それが愛する袈裟だとわかると盛遠は嘆き悲しみ、源渡にすべてを話して首を差し出した。すると渡は、「これほど悔いている人を殺すことはできない。私は出家して妻の菩提を弔おうと思う」と、みずから髪を切ってしまった。盛遠はこの姿をみて、自分も髪を切り出家したという。

浄覚と文覚
いかがでしょう。盛遠を軍太、源渡を三平、袈裟を「おかん」にすれば、大筋がほとんど同じだと思えます。『源平盛衰記』は南北朝の頃に成立したと考えられ、それ以後は謡曲や浄瑠璃など文学へ大きな影響を与えました。文覚発心譚についても同様で、良く知られた貞女・袈裟御前の物語が、カンカンとなる珍

しい墓石に、細かい設定を変えて定着したのでしょう。もしかすると、文覚発心を盛岡風にアレンジして、芝居などに仕立てようとした人物の手によるものかもしれません。出家した軍太の法名が、文覚に似た「浄覚」であることも、さりげなく原典を匂わせる手法のような気がします。

おわりに

最後に、三平と軍太が盛岡築城の工事現場で働いていたという設定が、なぜ生まれたのか考えてみましょう。三平が盛岡に帰郷するため、工夫に紛れたという以外の理由を考えると、盛岡城が花崗岩丘陵に建てられていることが一つ浮かび上がります。そのため築城時には、花崗岩の石材に困ることはなく、城の石垣にもふんだんに用いられています。

つまり、この「貞女おかん」の伝説が語られ始めたころは、「土工頭だった軍太が『おかん』の供養のために、墓石となる花崗岩を盛岡築城の工事現場から工面した」という件があり、年月が経つにつれて割愛されたのかもしれない。この伝説を初めて知った時に、なぜ工事現場の工夫なのか疑問に思いましたが、そう考えるとなんとなく辻褄があうように思えます。

(文：江口知秀)